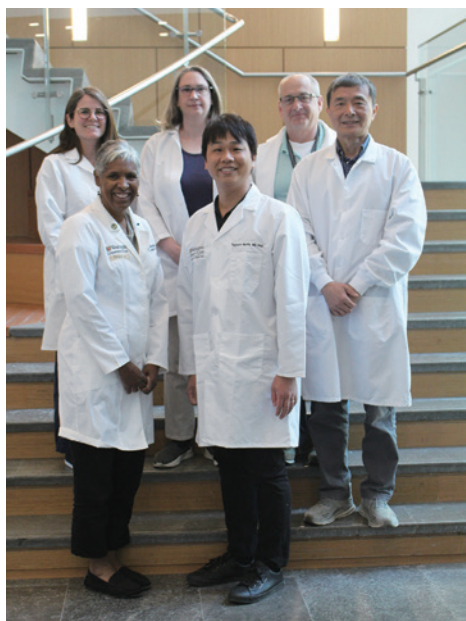


WashUでの2年間

皆さん、St. Louisという地名をご存知ですか？ 2023年WBCで活躍したNootbaar選手が所属するCardinalsの本拠地です。Missouri州東部に位置し、かつては全米第4の大都市として西部開拓時代を支えました。現在のSt. Louisは一部地域で治安の課題が指摘されていますが、危険なエリアを避ければ、都市の利便性と豊かな自然が調和し、人々もフレンドリーで大変住み心地のよい街です。象徴的なGateway Archは高さ192mで、アメリカで最も高い記念碑として国立公園の中心となっています。そんなSt. Louisにキャンパスを構えるのが、Washington University in St. Louis (WashU) です。Hidden Iviesに数えられ、中西部のHarvardとも呼ばれる名門で、26名のノーベル賞受賞者を輩出しています。特にWashU Medicineは全米屈指の評価を受け、2023年・2024年のBRIMR Rankings of NIH Fundingで全米2位という輝かしい実績を誇ります。

私は産科医として周産期診療に携わる中で、子宮収縮の重要性を痛感し、学位研究では子宮収縮抑制薬がヒト胎児に与える影響を生理学的に調べました。そこから母体生理学にも関心が広がり、子宮収縮メカニズムの研究で名高いEngland Laboratoryへ、2023年6月から2年間留学することを決意しました。海外で初めての研究分野に挑み、全て英語で意思疎通する環境は非常に刺激的でした。Comfort Zoneを飛び出した高い負荷の中でも、研究室の仲間たちが基礎から親切・丁寧にサポートしてくれ、毎日大いに助けられました。



←England Laboratoryメンバー(前列中央が筆者)

Washington University in St. Louis

村田 強志

福島県立医科大学産科婦人科学講座

私のテーマは「子宮収縮を修飾する因子とそのメカニズム」で、1年目はKイオンチャネル、2年目はオキシトシン受容体に注目し、肥満や遺伝子変異がどのように子宮収縮に影響するかを追究しました。研究が思うように進まず苦しい時期(イベントが少ない1-2月とも重なりとてもつらかったです)もありましたが、何とか耐え忍び、国際学会での発表(2演題)や筆頭著者論文(1本)、共著(3本)など成果を残せました。日々生きた英語に揉まれ、英語力も大きく向上しました。

プライベートでは家族と数えきれないほど旅行し、ラボメンバーから「また旅行?!」と驚かれるほどアクティブに過ごしました。家族ぐるみで仲良くしてくれる友人もでき、ハロウィン・感謝祭・復活祭・BBQなどアメリカ文化も堪能できました。アメリカ生活を家族と満喫し、最強の絆を手に入れたことは、留学最大の宝物のひとつです。この留学で、日本では出会えなかった人々と価値観に触れ、自分の「当たり前」が揺さぶられる経験をしました。異文化や多様な考え方を受け入れる柔軟さを養うと同時に、自分の信念・価値観・存在意義(私が「確固たる自分軸」と呼ぶもの)についても深く考えるきっかけとなりました。こうした気づきこそが留学の最大の魅力だと思います。

2年間の留学生活は、人生で最も楽しい時間と、まるで世界の底辺にいるかのような苦しい時間が交錯し、人生で最も密度の濃い時間となりました。この経験を通じて、ちょっとやそっとの困難には屈せず、諦めず挑戦し続ける力とトラブルを楽しむ精神力を身につけることができました。留学で得た学びや成長は、私の一生の財産です。今後もこの経験を糧に、自己研鑽に励むとともに、後進の育成にも全力を尽くしてまいります。

このような貴重な機会を与えてくださったWashington University in St. Louisの関係者の皆様、福島県立医科大学の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。また、常に支え、共に歩んでくれた妻と娘、息子、遠く日本からサポートしてくれた家族、さらに私たちの留学生活を彩り豊かにしてくれた友人たちに心より感謝いたします。円安という厳しい状況下でしたが、上原記念生命科学財団の皆様から多大なるご支援を賜り、この挑戦をやり遂げることができました。厚く御礼申し上げます。

セントルイス・ワシントン大学 に留学して

Washington University in St. Louis
School of Medicine Pathology & Immunology

吉川 友理

岡山大学病院矯正歯科

◎留学までの経緯

私は2024年11月より米国ミズーリ州ワシントン大学に留学しております。破骨細胞を用いた変形性顎関節炎の研究で学位取得後からは、臨床に忙しく追われていた矢先に上岡寛教授と研究上司の井澤俊准教授からの勧めで留学に応募致しました。矯正歯科認定医取得後の出発となり、やむなく4か月間の留学になりました。留学先は上司が研究留学されていたSteven Teitelbaum教授のラボに決まりました。

◎海外での生活環境

“セントルイス・治安”と検索すると全米ワースト2位の記事ばかりで、いざ留学が決まると採択された嬉しさとは別に海外生活への不安に苛まれておりましたが、大学周囲は綺麗に整備され、治安の悪い地域に行かなければ自然が多く過ごしやすい街だとわかり安堵しました。生活面では大学寮を利用することでスムーズに留学生活をスタートでき、食費面ではやはり外食は高いので殆ど自炊を心がけました。

◎充実した研究留学

米国到着の翌朝からラボミーティングに参加し、同じ変形性関節炎をテーマにしたNidhi Rohatgi助教の下で研究することになりました。この短期留学で、しかも英語も不自由な私を受け入れてくれるのだろうかという心配と緊張感をよそに、今も第一線で活躍し続けておられる87歳のTeitelbaum教授から「Yuri! 君は自分の孫のようだ、よくこの研究室に来てくれた、ありがとう!」と握手しながら温かく迎えて下さったことに今でもとても感謝しています。毎週のラボミーティングでは得られた実験結果を発表し、研究方針について皆で検討する日々で、日本に居た時とは異なり研究に集中できる環境は忙しいながらも非常に新鮮で充実していました。

その中でNidhi助教は良い結果や賛美する意見ではなく、失敗や批判から次の研究にどう繋げていくか考える論理的思考をすることがいかに大切であるかを常に私に教えて下さいました。

◎留学期間の延長

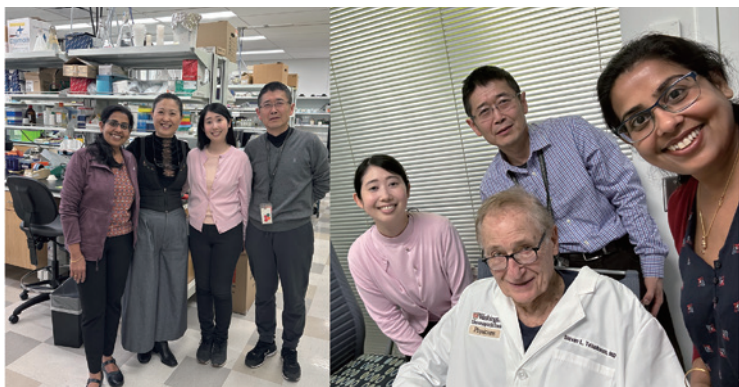
留学から3か月が過ぎる頃に研究が軌道に乗って結果がまとまり始めたのでこのままもう少し研究を続けたいという思いが日増しに強くなり、Teitelbaum教授に相談したところ「君は今や我々のラボにはなくてはならないintegrated memberになっている、可能ならば続けて欲しい」と留学延長を快諾して下さい日本教授宛てに依頼してくれました。その甲斐あって教授退官までの2か月間ではありますが留学延長が実現しました。

◎多くの研究者との出会い

ラボのメンバーや同じフロアの研究者達は優しく親切な方で研究や実験手技などを丁寧に教えてくれました。さらに私の生活や進路面でも親身に相談に乗って下さり国を超えた素晴らしい人間関係に恵まれたことはとても幸運でした。また現地の日本人の方々と素晴らしい交流が出来ました。大変優秀な研究者の方ばかりで分野や年齢は様々ですが深い繋がりを持てたことは私の人生観を変える貴重な経験となりました。

◎最後に

日本と違った苦労も沢山ありましたが留学先で学べた研究や経験は、非常に価値のあるものとなりました。Nidhi助教から学ばせていただいたことを生かし、帰国後も研究への道を少しでも歩んでいくことができたと願っております。このような貴重な機会と多大なるご支援を頂きました上原記念生命科学財団の皆様並びに関係者の方々、またご多忙のところ送り出してくださいました上岡寛教授、井澤俊准教授に改めて心より深く御礼申し上げます。



←Teitelbaum lab メンバーと